

<b>Title</b>	序：自由主義に先立つ自由
<b>Author(s)</b>	大木, 英夫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.24, 2003.1 : 3-4
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4102">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4102</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

序 — 自由主義に先立つ自由 —

聖学院大学総合研究所長 大木英夫

「自由主義に先立つ自由」という題は、ケンブリッジのリージャス・プロフェッサーとして就任したクエンティン・スキナーの講演 *Liberty before Liberalism* (1998) の翻訳書の題名である。本学の梅津順一教授の翻訳で二〇〇一年一月三〇日聖学院大学出版会から出版された。この書は、ケンブリッジのトリニティー・ホールのハウズ教授（聖学院大学総合研究所アングロ・アメリカ研究センターの顧問のひとり）を訪ねたとき、今日の話題の書として贈っていたものだものであるが、帰国の機上で一読して深く感銘を受け、ハウズ氏を通じて著者に出版の了解を得ることができた。聖学院大学出版会は、とくに十七世紀のピューリタニズム関係の貴重な文献の翻訳に関心をもち、最近ではウッドハウスの編纂による『パトニー討論』なども出版されている。研究所の大澤表氏と大学の澁谷浩教授の共訳によるものである。その他出版リストを参照いただければさいわいである。

スキナーの本書は、形態小にして内容は深甚である。イギリスの学者でよく小さくて深い本を書く人がいるが、これもその一例であろう。日本では、リベラリズムあるいはリバタリアニズムに対するコミュニタリアニズムというようないささか皮相なパースペクティヴで議論がなされるが、*Liberty before Liberalism* の〈before〉は、読者の知性を転じて歴史の深みへとひき戻す引力をもっている。ちなみに、スキナーの思想史的方法は本研究所における研究方法と呼応する

親近性を示しており、またここで取り扱われている対象そのものも本研究所の総合テーマと同一である。ピューリタニズムを取り扱っている。本書はリベラリズムの源泉に遡らしめる。スキナーはその思想を「ネオ・ローマン理論」と呼ぶ。序文でスキナーはこう言う。「自由主義がイデオロギー的に勝利すると、ネオ・ローマン理論は大部分信用が失われるままに放置されたのです。……本書が望むのは、われわれが失った思想世界に再び入り込むことを試みることで、この自由主義の主導権に疑問を呈することです」。この書で興味津津たる対決は、アイゼア・バーリンがリベラリズムの觀念地平で企てた哲学的自由論に対して、近代的自由の歴史的根源への遡及をもって批判したことである。その論駁にひらめくスキナーの思想的方法論は、鋭い剣のようである。バーリンはオクスフォード、スキナーはケンブリッジ、この二つの大学の違いは十七世紀以来顕著なものだが、ここには知的フェンシングを見るような迫力がある。リベラリズムとは、歴史的にはリバーティのための思想と身命をかけた革命闘争の〈aftermath〉と称してよからう。それを近代の「午前」と言えば、リベラリズムは「午後」の状況、その午後の紅茶を飲みながらの〈afterthought〉のようなものである。スキナーは、リベラリズム（以前）にそのリベラリズムのデルタ地帯をつくり出した革命状況の中に動いた「午前」の思想を取り出し、そしてその意味を再考する。ハウズ氏が当時ケンブリッジの知的関心の中心となったというが、たしかにこの書は近代社会の全体をその源泉に収斂させて焦点を結んでおり、その流れを受け継ぐ近代世界状況のどこでも、つまり日本においても、真剣に検討され、議論されて然るべきである。日本の戦後状況を大正リベラリズムの下流として捉えては不十分であろう。

ルネサンス人文学者の言葉で言えば「源泉へ」(ad fontes) Liberty (before) liberalism というリベラリズムの「前」へ遡って捉え直す必要がある。リベラリズムの議論には、あたかも戦前と戦後という戦後の「平和ボケ」があるのではないか。近代性をめぐる「午後」の議論は、「午前」の議論、〈before〉の深みを探らないならば、そのリベラリズムとかコミュニタリアニズムをめぐる知的作業も日本の海岸に碎ける外来の波に洗われる程度を脱することはできないと思う。だからこの本に学ぶことは、ひとり聖学院大学総合研究所の内部に限定されるべきではないように思われるのである。